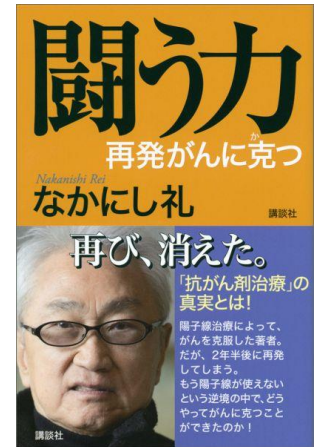


● Dr. 井上林太郎の書籍紹介

闘う力 -再発がんに克つ-
なかにし礼 著 講談社 2016年2月初版

はじめに

抗がん剤療法に関して、私達は「末期でも効き始めたらずっと効き、再投与もできる」という特徴をもつ、免疫チェックポイント阻害剤「ニボルマブ(商品名; オプジーボ)」を手に入れた。手術療法に関してはロボット手術が登場し、精度、安全性が向上した。放射線療法では、高精度放射線療法が一般的になりつつある。保険適用外で費用の問題は残っているが、陽子線治療、重粒子線治療の分野では、日本が世界の牽引役となっている。「進行がん、転移・再発がん」は、厳しいのが実情であるが、医学の進歩は頼もしい。ただし、死が常に付きまとう。多くの場合、「1ヶ月、もしくは、数ヶ月単位」で将来のことを考えなければいけない。場合によっては、「今日」「明日」の単位で--。その場合、私たちはどのように気持ちを整理するか。本書はその参考になったので、紹介する。



著者の紹介 ; なかにし礼

1938年中国・牡丹江市生まれ。数々の名曲の詩を手掛け、日本レコード大賞ほか多くの音楽賞を受賞。作家としても2000年に「長崎ぶらぶら節」で直木賞を受賞。2012年、食道がんが見つかり、闘病生活を描いた「生きる力-心でがんを克つ-」では陽子線治療を広く世に知らしめた。

著者の病歴

26歳時、心筋梗塞に罹患。54歳時(1992年)、心室細動という重篤な不整脈を伴う心筋梗塞に再罹患。2012年2月下旬(73歳)より、声が出にくい、胸のむかつき感、軽度の疼痛等を自覚するようになり、心臓病で通院中であった北里研究所病院で上部消化管内視鏡検査施行。4cm大の食道がんが見つかった。他臓器への転移はなく、ステージII。抗がん剤治療→手術→放射線療法を勧められたが、心臓の機能が悪いので手術には耐えられないと判断され、手術は拒否された。都内の他の病院で、抗がん剤治療と放射線療法を受けられたが、放射線療法は副作用のため4回で止められた。腫瘍は2cmまで縮小していた。退院後、国立がん研究センター東病院での陽子線治療(保険適用外のため約300万円)を選択された。そして6月28日、抗がん剤と陽子線の併用療法が終了。7月20日検査。がんは完全に消えていた。-「生きる力」より-

本書の内容・感想

がんが消えてからも、3ヵ月毎の検査は続いた。2015年1月27日CT検査施行。リンパ節がほんの少しだけ膨らんでいたため、がんセンター東病院で、PET-CT施行、ピンク色に光っていた。気管支の近くで、前回がんのあった食道の裏側辺りだったので、今回は陽子線を使うことが出来ない。穴が開いてしまう可能性があるためだ。他方、気管支にも密接していて、それがいつ気管支の膜性壁を破ってしまうかわからないという切迫した状態であった。この「穿破」が起きてしまうと多臓器不全となり、そのまま死に至る。生きられたとしても長くても4日。そういう危険な状態であった。

2月25日手術。想像以上にがんは気管支に密着していてメスを入れることは難しく、何もすることが出来ずに終わった。CT検査をして3月2日退院。がんは当然ながらさらに大きくなっていった。主治医より、再度「穿破」の説明があった。「なかにしさん、穿破が起きるのは早ければ今日かもしれないと思ってくださいな」。

抗がん剤治療を開始。著効した。1回目で約60%の大きさになり、2回目でその半分になった。そして、4回目の効果を見るために、7月13日、PET-CTを施行。がんは消えていた。

しかし、放射線科のA医師より、「この状態は完全に治っているわけではなく、目に見えない大きさのがんは間違いなくある。陽子線で叩きましょう」。その後、抗がん剤治療と陽子線治療を行い、9月13日終了。A医師より、「これで十分でしょう。」

尚、5月25日から今回の闘病を題材にした「夜の歌」という連載小説を、サンデー毎日で始められた。

「穿破」はたまたま起きなかった。それは結果論であって、毎日奥様と、「今日も生きたね」とハイタッチされていた。どのようにして過ごされていたのか。第五章「闘う力」より抜粋する。

『習慣として好きな作家の本は読んでいたが、前回のように先人の言葉を借りて自分を勇気づける余裕などはなかった。そんな発想すら虚しく感じるような絶望感が私を支配していた。(中略) どうしようもない、死霊が鉄槌を持って私の目の前に立ちはだかっている。いつ穿破が起きて死んでしまうのかわからない、言わば死のカウントダウンの最中に、希望や勇気など持とうとすることなどファンタジーでしかない。

瀕死の状況にある作家によって創造された文学とか芸術なんて過去には存在しないのではないか。残酷な世の中に生きることを強いられた作品であっても、ほとんどが希望というものを持ちながら生み出されている。ドストエフスキーの作品でさえもそこには希望はあった。そういった中で私にとって最も心素直に受け止められたものがある。それは「般若心経」だ。

「般若心経」が語るものは「虚空」だ。「色即是空」「空即是色」この世の森羅万象はすべて空であり、空なる世界にこそ森羅万象がある。いかにも禅問答のごとき表現だが、私はこの表現にこそ人間の叡智が宿っていると感じるのだ。それは虚無主義やニヒリズムといった人間否定の思想とは違う。「空」にして「色」、「色」にして「空」という全否定と全肯定はいったいなにを意味するか。それはたぶん人間存在を三百六十度丸ごとすべてを認めるといふ意味であろう。ゆえに「不生不灭」であり「不垢不浄」「不増不减」なのである。がんなどという病と闘っている身にとってはまことに勇気を与えてくれる言葉でもある。たとえば、「無老死」「無苦・集・滅・道」「無有恐怖」「遠離一切顛倒夢想」、病気などになってくよくよすることはない。畢竟たどりつくところは「究竟涅槃」なのだから。信仰もないのに涅槃に到達することができるのか、などと心配するには及ばない。涅槃そのものも「色即是空」かもしれないではないか。

と、私は勝手な解釈をしながら、「般若心経」を何度も読んだ。かつて心臓病に倒れた頃、「般若心経」を毎日写経して過ごしたことがあるが、その頃より今のほうが数倍心にしみる。

そしてもう一つ、心にしみた言葉は、旧約聖書の「伝道の書」である。

「空の空、空の空、いっさいは空である。日の下で人が労するすべての労苦は、その身になんの益があるか。世は去り、世はきたる。しかし地は永遠に変わらない。日はいで、日は没し、その出た所に急ぎ行く。川はみな海に流れ入る、しかし海は満ちることはない。

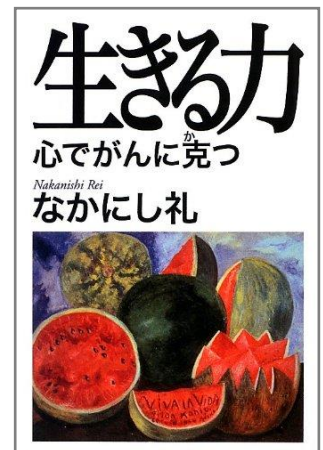
すべての事は人をうみ疲れさせる。死ぬる日は生るる日にまさる。知恵が知者を強くする。善を行い、罪を犯さない人はこの世にいない。

若い者よ、あなたの若い時に楽しめ。あなたの若い日にあなたの心を喜ばせよ。若い時と盛んな時はともに空だからである。」

「般若心経」も「伝道の書」もともに宗教書であるが、ユダヤ経と仏教の教えがあまりに似ていることに驚くのである。といつてもなにも急に私が信仰に目覚めたわけではない。宗教書は常に死について語っているから耳を傾けるに値するのである。私はどこまでもカミュを愛する者の一人であるから、神もない、明日もない、希望もない、何もない、という「無」の中で、何ものにもすがることなく鈴木大拙言うところの「日本的靈性」の「命」の原理に従い、創造の神秘と歓びに導かれて生きる道を好む。

その生きる道とは、言葉を変えて言うなら、真に私に活力を与えたのは「小説を書く」という創作活動だった。』

初発の時の闘病記「生きる力」の中では、カフカ、チェーホフ、ドストエフスキー、カミュ等の著書を引用され、それらの英知に触れたことが「生きる力」となってくれたのだと説かれている。だが「再発」した



今回は、それが打ち砕かれたのだ。闘う力は、「般若心経」と「旧約聖書」からしか得られなかったと言われるのである。

私も、今後進行がんに罹った場合はどうしようか、いつも迷っていた。私は本書を読んで安堵した。あの難解な、カフカ、カミュ等の古典を読む必要はないのだ。そして決意した。「般若心経」に頼ろうと。今はあまり興味を抱かないが、いざというときは役立つかもしれない。とりあえず、ネットで注文した。

理事 井上 林太郎